

## 日本人学部生・在学留学生と共に学ぶ短期プログラム

——2017年度ヨウツェノ学院短期プログラムの報告——

山森理恵

### 1. はじめに

本稿は、2017年度に本学で行われたフィンランドヨウツェノ学院（Joutsenon Opisto）短期プログラムの概要とその日本語授業について報告するものである。本プログラムの日本語授業の特色は、ヨウツェノ学院学生・本学学部生が「共に学ぶ時間」を設け、その時間を中心としたシラバスが組まれていることにある。

本プログラムは、本学文学部北欧学科の学生との交流も目的としており、プログラムが始まった2016年度から、文学部北欧学科の学生を中心に本学学部生が日本語授業に参加する形をとってきた。2017年度はさらに本学留学生の参加も促し、ヨウツェノ学院学生・本学学部生・本学留学生の三者が「共に学ぶ」形で日本語授業を行った。

このように「共に学ぶ」ことを重視するのはなぜか。短期プログラムのような限られた時間の中でも、立場や背景、文化が異なる者同士が共に学ぶことによって、異なる他者を知り、共に生きていくことにつながるということが期待できるという考えからである。ユネスコ（1996/1997）は、平和や自由や社会正義の理想を実現するには教育が不可欠な要素であり、「知ることを学ぶ」、「為すことを学ぶ」、「共に生きることを学ぶ」、「人間として生きることを学ぶ」、これらが学習の4本柱であるとし、「(他者と)共に生きることを学ぶ」ことが、教育の最大課題の一つであると指摘している。紛争の絶えない今日、他者を知らしめ、共通の目標を持たせるような経験をさせることが、教育が採るべき方法であるとも指摘している。また、バイラム（2015）は、言語の道具としての有用性だけでなく、言語教育の教育的価値について考えることの重要性について述べている。したがって、日本語教育も当然ながら、道具としての日本語にのみ焦点を当てるのではなく、共に生きることにつながる教育、他者を知り対話を深めていくことにつながる教育であるべきであると考えられる。

本プログラムのような非常に短期の日本語プログラムにおいても、授業時間数は限られてはいても「共に学ぶ時間」を確保することで、他者を知り、対話を深め、共に生きていくための学びを、プログラムに参加する一人一人が少しでも得るべきである。そのような貴重な機会ともなるようにという目的から、「共に学ぶ時間」を中心としたシラバスを組んだ。

## 2. プログラムの概要

本プログラムは、本学国際教育センターが国際交流・グローバル化を推進するために行うさまざまな取り組みの一つで、2016年度から始まった。ヨウツェノ学院の学生を、短期間、本学に受け入れる形で実施されている。

ヨウツェノ学院は、フィンランドにおける国民高等学校、「Kansanopisto」の一つで、フィンランド南東部ラッペーンランタ（Lappeenranta）市にある国民高等学校である。国民高等学校とは、成人教育を目的とした教育機関で、フィンランド国内には87校あるが、近年大学の予備教育の役割を担うことが多くなってきている。ヨウツェノ学院は、1950年に設立され、「日本語・日本文化コース」などの外国語系と、「教員養成基礎コース」や「心理学コース」などの人文系のコースを擁し、各コースとも1年制で、国内外の大学と提携し、大学の単位認定も可能になっている。2017年度の本プログラムに参加した学生は日本語・日本文化コースで学ぶ学生であった。

プログラムは、日本の文化を体験すること、生きた日本語に触れることを目的とし、本学文学部北欧学科の学生との交流もねらいとして始まり、2017年度の本プログラムは2月23日から3月7日までの約2週間開催された。

日本文化の体験も目的としていることから、日本語の授業のほかに、キャンパス内を巡るツアーや各地の見学、学校訪問、柔道体験、防災体験、秦野市民の協力を得て行う着付け体験などの企画も行われた。プログラムの概要は表1の通りである。

## 3. プログラムにおける日本語授業

### 3.1 日本語授業の概要

本プログラムの中の日本語授業は、1回あたり50分授業を3時限まで実施するという形で計6回行われ、それに加え、プログラムを通して得た経験を振り返る目的で日本語授業最終日には日本語によるプレゼンテーションが実施された。

日本語授業は、先に述べた通り、ヨウツェノ学院学生・本学学部生・本学留学生が「共に学ぶ時間」をもっとも重要な時間と位置づけた。6回の授業実施日の3時限目を毎回「共に学ぶ時間」とし、日によっては1時限目、2時限目から、本学の北欧学科に在学する学部生に参加してもらった。さらに、学部生だけでなく、2017年度は本学別科研修課程に在学する留学生からも希望者を募り、参加を促した。

プログラムに参加したヨウツェノ学院の学生は10名で、日本語レベルとしては、いわゆる初級の教科書の後半を学習途中であった。本学学部生は、プログラムのサポート募集の呼びかけに応じて10名が参加してくれた。2017年度の学部生の参加者は全員文学部北欧学科の学生で、彼らはこのプログラム終了後、ヨウツェノ学院への短期留学を予定していた。また、本学に在学する留学生の参加者は3名（インドネシア2名、スリランカ1名）でいずれもいわゆる初級

表1 2017年度ヨウツェノ学院短期プログラム スケジュール

	午前	午後
1日目	来日	オリエンテーション 歓迎会
2日目	日本語①②③	小田原城見学 かまぼこ工場見学
3日目(週末)	松田町桜まつり 参加	自由行動
4日目(週末)	自由行動	自由行動
5日目	見学旅行 ジブリ美術館・スカイツリー・浅草	
6日目	日本語④⑤⑥	宮ヶ瀬ダム見学
7日目	日本語⑦⑧⑨	相模高等学校中等部訪問
8日目	日本語⑩⑪⑫	柔道体験
9日目	日本語⑬⑭⑮	防災体験
10日目(週末)	ホームビジット	ホームビジット
11日目(週末)	自由行動	自由行動
12日目	見学旅行 日枝神社, 国立劇場, 赤坂迎賓館	
13日目	日本語⑯⑰⑱	和服着付け・茶道体験
14日目	日本語⑲(発表会)	修了式 サヨナラパーティー
15日目	東京へ移動	自由行動
16日目	帰国	

レベルの教科書を終了した段階であった。彼らもまた、プログラムのサポート募集の呼びかけに応じて参加した。

日本語授業のシラバスは表2の通りである。プログラム9日目を除いて日本語授業は筆者が担当し、9日目のみ本プログラムコーディネーターである別教員が担当した。

### 3.2 具体的な活動内容

日本語授業で行った主な活動について、本学学部生・本学留学生が担った役割と、活動の内容を述べる。

#### 3.2.1 「グループで話す」

「共に話す時間」として、少人数のグループに分かれて話す時間を複数回設けた。この活動では、ヨウツェノ学院学生が漢字が読めない、意味がわからないといった場合は本学学部生にサポートしてもらうものの、基本的に、ヨウツェノ学院学生・本学学部生・本学留学生は対等な立場で活動に参加した。

日本語授業初回であるプログラム2日目は、お互いをよく知るため、家族や趣味、好きなもの

表2 日本語授業 シラバス

プログラム 日程	日本語	1 時限目	2 時限目	3 時限目
2 日目	日本語 ①②③	コース説明 プレゼンテーション説明 擬音語・擬態語	擬音語・擬態語	グループで話す（自分について、家族や家の写真について）★
6 日目	日本語 ④⑤⑥	週末に撮った写真について話す プレゼンテーション準備	留学生とグループで話す ☆	グループで話す（旅行について、理想の人について）★☆
7 日目	日本語 ⑦⑧⑨	日本人への質問調査準備	日本人への質問調査準備 生会話の聞き取り	教室の外に出て日本人に質問調査★☆
8 日目	日本語 ⑩⑪⑫	プレゼンテーション準備	生会話の聞き取り	グループで話す（学校について）★☆
9 日目	日本語 ⑬⑭⑮	演劇的アプローチ★☆	演劇的アプローチ★☆	演劇的アプローチ★☆
13 日目	日本語 ⑯⑰⑱	プレゼンテーションのやり方	プレゼンテーション準備	プレゼンテーション準備 ★☆
14 日目	日本語 ⑲	プレゼンテーション		

★本学学部生が参加 ☆本学留学生が参加

の、今の気持ちなどに関する質問が書かれたビーチボールを受け渡ししながら<sup>1)</sup> 5人程度のグループで話してもらった。ビーチボールを利用することの利点は、よく知っている者同士でも基本的な質問に楽しんで答えたり、人の答えに耳を傾けたりすることができる点である。ヨウツェノ学院の学生同士・本学の学部生同士はそれぞれよく知っている人が多くいると考えられたため、この手法を用いた。

6 日目、ヨウツェノ学院学生と本学留学生が話した際は、日本語の勉強を始めたきっかけや、日本／フィンランドでの生活などについて本学留学生1名ずつを中心にグループを作り、話してもらった。

さらに、6 日目・8 日目は、身近で興味を持てる話題を話してもらった。「理想の人」「旅行」「学校」など、ヨウツェノ学院学生の意見も一部取り入れながらトピックを決め、4人程度のグループで、それぞれのトピックに対して用意された複数の質問<sup>2)</sup> に答えていく形で話してもらった。

その結果、グループでの話し合いでは笑い声や時に歓声まであがるほどの盛り上がりを見せていた。参加者を対象に行ったプログラム終了後のアンケートの結果に、それが現れていた。この活動を4段階で評価するよう求めた問いに対し、ヨウツェノ学院学生10名中6名がもっとも高い評価、4名が2番目の評価と比較的高い評価であった。「(グループで話す活動がいいと思うのは) トピックが好きだからです。(原文ママ、以下アンケートの引用はすべて同様)」というコメントがあり、トピックの選定が重要な鍵となったようである。また、「デートについて話したが一番楽しかったです。よくわかりました。」というコメントから、異なる立場であ

りながらも共通の話題で共感を覚えたことがうかがえる。日本語の授業でよかったことを問う質問に対しても「サポート人（本学学部生・本学留学生）と話すこと」という回答があり、対話し、立場を超えて理解し合うことを楽しんだことがうかがえる。

### 3.2.2 教室外での質問調査

プログラム7日目には、教室の外に出て大学キャンパス内で質問調査を実施した。ヨウツェノ学院学生に、より多様な日本語、多様な価値観に触れてもらうためである。ただし、キャンパス内とは言え、外国人との接触に慣れない人と初対面でやりとりをすることから、声掛けや質問の答えの聞き取りなどさまざまな困難も予想される。そのため、この活動では、本学学部生・本学留学生にサポート役を担ってもらい、ヨウツェノ学院学生が、必要に応じて同行の本学学部生や本学留学生にサポートを受けられるようにして実施した。

また、その際の調査の内容は、最終日のプレゼンテーションのテーマに関連する内容にして、プレゼンテーションに生かせるようにした。そのため、実施日以前にプレゼンテーションのテーマ決めを行い、当日、1時間目・2時間目を使って質問を作成、声掛けから質問まで予行演習を十分行ったうえで調査に臨んだ。調査の際、サポート役の本学学部生・本学留学生には、ヨウツェノ学院学生の背後に立ち、困ったときにだけサポートをするよう指示し、両者ともその指示通り実践してくれた。

この調査について、ヨウツェノ学院の学生は、当初非常に不安がっていたが、プログラム終了後のアンケートでは、10名中9名が4段階評価のもっとも高い評価、1名が2番目の評価と、高い評価であった。「ちょっとこわかったです。。。」「といった内容のコメントも複数あったが、「少しきんちょうしましたが、よくできたと思います。」「まず、こわかったけれど、サポート学生（本学学部生・本学留学生）が「がんばって」と言っていたから、だいじょうぶになりました。いいいけんでした。」といったコメントもあった。やや心理的負荷の高い活動であったようだが、満足のいく活動ができ、自分たちの日本語力に自信を持ち、達成感につながったと考えられる。

### 3.2.3 最終プレゼンテーション

プログラムの最後に、この質問調査の結果を生かす形で最終プレゼンテーションを行った。この活動では、本学学部生・本学留学生は、プレゼンテーションのためのスライド作成・発表練習のサポート、プレゼンテーション本番では聴衆役を務めた。

プレゼンテーションは、プログラム中に経験したこと、学んだことを集大成として、ペアで、日本に来て見たもの、わかったことの中から1つテーマを決めて発表することとした。発表の構成は、「見てわかったこと」、「日本人への調査でわかったこと」、「そこから思ったこと、わかったこと（日本に来るまえに思ったこととちがったこと／フィンランドとちがうこと）」の3つから成るものとするよう指示した。その結果、全部で5組のペアによって、「日本のお菓子」「日本人の服」「東海大学の色々なクラブについて」「わたしたちの好きな日本の食べもの」「コンビニ」というテーマで発表が行われた。

プログラム終了後のアンケートでは、この活動に対する4段階評価は、10名中2名がもっとも高い評価であったものの、6名が2番目の評価、2名は3番目の評価であった。その理由については「じゅんぴの時間はみじかかったです。」「たいへんでした。忙しいですから。」と準備時間の短さを指摘する記述があった。また、「おもしろかったです、少しむずかしかったです!」「楽しかったです。でも、ちょっとむずかしいです。」と困難さを指摘する回答もあった。しかし、「ペアでプレゼンテーションすることはたのしかったです。」というように発表を楽しんだ様子がうかがえるコメントや、「まず、とてもこわかったです、いいけいけんでした。」「きんちょうしましたが、その後で安心しました。」といった、最終的には達成感が得られたことを示すコメントもあり、一定程度満足したことがうかがえる。

### 3.2.4 そのほかの活動

これらの主な活動のほかに、漫画を例にしつつ擬音語・擬態語の紹介を行った。

また、生会話の聞き取りにも挑戦してもらった。初級段階では、通常、既習の理解しやすい語彙・文法で構成された会話がクリアな音声で録音されたものを教材として使用するが、教室の外の現実の世界はそれとはまったく異なる。そのため、実際の大学生の会話を録音したものを教材として使用した<sup>3)</sup>。ただし、初級段階ということを考慮し、比較的ゆっくり話している部分1分程度を利用した。コントロールされていない会話であるため、背景情報を十分に与え、語彙の導入を行ったうえで聞いてもらった。ヨウツェノ学院学生は、相づちの多さ、「そうそうそう」といった自然会話に見られる特徴に注目した様子であった。

さらに、別教員の担当で、体を使いながら文化を理解する演劇的アプローチも実施した。五感を駆使しつつ、「縄文時代」をテーマにしたドラマ作りに取り組んだ。

## 3.3 「共に学ぶ時間」のねらいと評価

### 3.3.1 「共に学ぶ時間」に期待されること

先述の主な活動は、「共に学ぶ時間」としての活動であった。これらの「共に学ぶ時間」の活動から、どのようなことが期待できるかを確認しておきたい。

「共に学ぶ」ことにより、ヨウツェノ学院学生・本学学部生及び本学留学生、三者に共通することとして、お互いを知り、異なる立場や背景、文化を理解し、対話を深め、視野を広げることが期待される。

特に、ヨウツェノ学院学生は、本学学部生と共に学ぶことで生きた日本語を学ぶだけでなく、同年代の日本人の若者の興味関心やその考えに対する理解を深めることが期待できる。加えて、本学留学生と共に学ぶことを通して、自分たちとは異なる出身、立場、目的の日本語学習者の存在を知り、それが刺激や励みとなること、異なる文化に触れて視野が広がることを期待できる。

また、本学北欧学科の学部生については、自分たちの学習言語を母語とし、自分たちの母語を学ぶ同年代の若者と交流することで、刺激を受ける可能性がある。さらに、ヨウツェノ学院学生の日本語学習をサポートすることで、自らができることを自覚し、一人一人の自信と成長

につながることを期待できる。

本学留学生にとっても、自分たちとは異なる日本語学習者との交流を通して、自分の学習目的を再確認し、日本語学習に対する意欲を一層高める良い機会になる。普段は本学学部生からサポートを受けることも多いが、日本で生活面の知識を活用してサポートする側に回る事ができ、自信につながることを期待される。さらに、彼ら自身も、異なる文化に触れ、視野を広げることが可能となる。

### 3.3.2 「共に学ぶ時間」に対する評価

このような期待のもと重視された「共に学ぶ時間」について、参加したヨウツェノ学院学生・本学学部生・本学留学生はどのように捉えたのか。参加者を対象に行ったプログラム終了後のアンケートの結果から、どう評価したかを見ておきたい。

ヨウツェノ学院学生に対するアンケートの結果を見ると、本学学部生と「共に学ぶ時間」としてさまざまな活動を行ったことについて、4段階で評価するよう求めた質問に対し、全員が4段階中もっとも高い評価であった。「サポート学生（本学学部生）がとてもしんせつでやさしかたです。日本語について手伝ってくれてうれしかったです。」といったコメントが寄せられた。

また、ヨウツェノ学院学生に対するアンケートで、本学留学生と共に活動を行ったことについても評価を求めたところ、やはり全員が4段階中もっとも高い評価で、「よかったです。いろいろな国から来ましたですからおもしろです。」というように、異なる国に関心を持ったことがうかがえた。異なる国に関心を持つことは、異なる国や異なる立場に対する理解の出発点となる。理解が広がることで、視野も広がっていくことが期待できる。

次に、本学学部生に対して行ったアンケートでも、回答が得られた5名全員が、「共に学ぶ時間」については4段階評価でもっとも高い評価であった。「フィンランド人の考え方に触れることができ新鮮だったから。日本語を一生懸命使おうとしている姿をみて刺激を受けることができたから。」といったコメントがあり、「共に学ぶ時間」を通して、異なる他者の考えを知り、その姿勢に刺激を受けたことがうかがえる。加えて、この短期プログラムを通して得られた物があるかという問いに対しては、「わからないことがあっても、とにかく実践していくことが大切だと感じた。私もフィンランドに行ったら、気になることは積極的に聞いていこうと思った。」というように、自分とは異なる姿勢を見て、そこから学んだことがうかがえる。「フィンランドの学生、(フィンランド人)と日本の学生(日本人)の見方、考え方の違いを体感できる。」「国が違うけど、ひとつのことに對し、一緒に笑うことができるとても楽しかったです。いい経験になりました。」といったコメントも寄せられ、異なる考え・立場を理解し、違いを乗り越えて理解し合えることを体感したことがうかがえる。

さらに、本学留学生に対して行ったアンケートでも「共に学ぶ時間」について4段階での評価を求めたところ、回答が得られた2名ともが4段階中もっとも高い評価をつけた。互いに共有し合えるというコメント、新しい知識と新しい友達を得ることができるといったコメント、次回はより多くの本学留学生の参加を期待するといったコメントが寄せられた。

このように、「共に学ぶ時間」を、ヨウツェノ学院学生・本学学部生・本学留学生の三者がいずれも高く評価し、この時間が、他者を知り、対話を深め、共に生きていくための学びにつながったと考えられる。

### 3.4 日本語授業を運営するうえで

このようなヨウツェノ学院学生・本学学部生・本学留学生の三者による「共に学ぶ時間」を中心としたプログラムを運営するうえで、難しさもあった。積極的に参加してくれる本学学部生、留学生の確保である。意欲的に参加し、ヨウツェノ学院学生と向き合ってもらった必要があったが、プログラムへの参加はボランティアであるため、参加を希望したからといってその全員に積極的な参加を期待することはなかなか難しい。事前に予定の確認のメールをやり取りするなどして、その過程で意欲が乏しく連絡が途絶える学生を見極めるなど、積極的な参加が見込める人数の把握に努めるという方法が考えられるが、それでも前年度のプログラムでは、参加を予定していた学部生の欠席があった。

そこで、2017年度は、本学学部生・本学留学生一人一人に出席カードを用意し、出席のたびにスタンプを押して、出席することへの達成感をより感じてもらえるように工夫した。さらに、コース終了時に、ヨウツェノ学院学生に色紙に寄せ書きを書いてもらい、出席カードを色紙の裏に貼って、一人一人に手渡した。

## 4. まとめ

このような取り組みを行った、「共に学ぶ時間」を中心とした短期プログラムの日本語授業は、参加したヨウツェノ学院の学生にとって、生きた日本語に触れる機会となり、また、ヨウツェノ学院学生・本学学部生・本学留学生の三者にとって、他者を知り、対話し、共に生きていくための貴重な学びの機会となったものと考えられる。

この結果は、異なる者同士が共に学ぶ機会の大切さを改めて示している。今後の日本語授業において、短期プログラムに限らず、このような機会を作る取り組みが重要であることを示唆している。言語力向上についても留意しつつ、他者への理解と対話、共に生きていくための学びがより進む効果的な方法をさらに工夫していく必要があると思われる。

### 謝辞

本稿執筆にあたり、ヨウツェノ学院に関する情報をご提供くださったヨウツェノ学院中川由紀先生に感謝の意を表す。また、本プログラムのシラバス立案、実施にあたり、多くのご指導をくださった本プログラムコーディネーター、東海大学斉木ゆかり先生に謝意を表す。

### 注

- 1) 「家族はどこに住んでいますか。」、「好きな色は何色ですか。」、「今、何がしたいですか。」、「いちばん大切なものは何ですか。」、「次に生まれるときは、男がいいですか。女がいいですか。」な

どの、身近な質問が書かれたビーチボールを受け渡しし、受け取ったときに右手親指の下にある質問に答えるというやり方である。

- 2) 「理想の人」「旅行」の質問は『にほんごこれだけ！2』を参考にした。
- 3) 奥野他（2016）に倣う形で教材化したものを使用した。

#### 参考文献

- 庵功雄（2011）『にほんごこれだけ！2』ココ出版
- 奥野由紀子・金庭久美子・山森理恵（2016）『中級から上級への日本語なりきりリスニング』鎌田修 監修 ジャパンタイムズ.
- 中川由紀（2015）「機関紹介及び学生の自己評価から考察した JLPT と CEFR の比較」『日本語教育ワークショップ proceedings 2015春』 pp.38-41 東海大学ヨーロッパ学術センター.
- 中川由紀（2017）「ヨウツェノ学院日本語・日本文化コースの研修旅行2017」『日本語教育ワークショップ proceedings 2017秋』 pp.27-30 東海大学ヨーロッパ学術センター.
- バイラム, M. (2015) 細川英雄 (監) 山田悦子, 古村由美子 (訳) 『相互文化的能力を育む教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店. (Byram, M. S. (2008). From foreign language education to education for intercultural citizenship. Multilingual Matters.)
- ユネスコ (1997) 『学習：秘められた宝 ユネスコ「21世紀教育国際委員会」報告書』天城勲 訳 ぎょうせい. (UNESCO (1996) Learning: The Treasure within. Paris: UNESCO.)